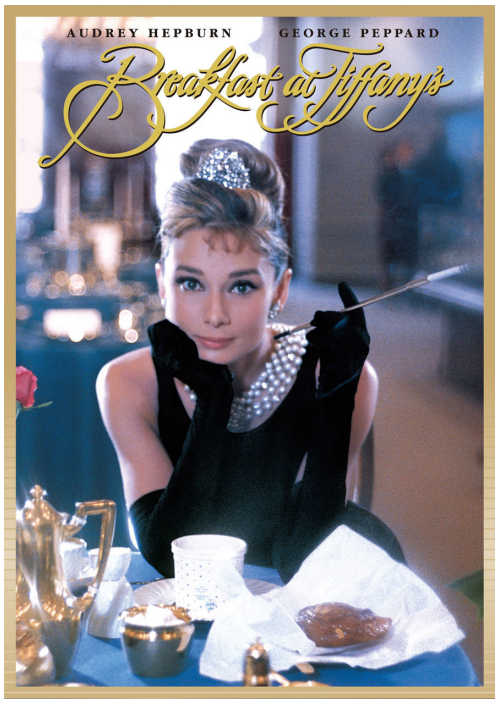
2019.8.22
vol.78

シネマ・ド・りぶらの
コラム・ド・シネマ

映画を読む

本日の上映作品『ティファニーで朝食を』



©1961 PARAMOUNT PICTURES CORP. JUROW-SHEPHERD PRODUCTIONS. All Rights Reserved.ACADEMY AWARD (R) AND OSCAR (R) ARE THE REGISTERED TRADEMARKS AND SERVICE MARKS OF THE ACADEMY OF MOTION PICTURE ARTS AND SCIENCES

8 月 22 日（木）

① 10:30 ～　② 14:00 ～　③ 18:30 ～

ＮＹの安アパートに暮らすホリーの日課は、一流宝石店ティファニーのショー・ウィンドウを見ながら、朝食のクロワッサンを食べることだった。ある日彼女のアパートの隣室に、作家志望の青年ポールが越してきた。ポールはたちまち、不思議な魅力をもつホリーに惹かれていく……。輝く宝石のようなオードリーの魅力をちりばめた、素敵でおしゃれなラブ・ストーリー。二人のロマンスは、アカデミー賞 (R) にも輝いたヘンリー・マンシーニの主題歌「ムーン・リバー」のメロディと共に、いまも多くの女性の心を捉えている。

監督：ブレイク・エドワーズ
出演：オードリー・ヘプバーン、ジョージ・ペパード
製作：1961 年　アメリカ　カラー　114 分

『カポーティ』	越智 博美／著	勉誠出版	930.278
『村上春樹 < 訳 > 短篇再読』	風丸 良彦／[著]	みすず書房	930.29
『ティファニーで朝食を』	トルーマン・カポーティ／著	新潮社	933.7
『シネマで散歩、ニューヨークの旅』		近代映画社	778.2
『恋するジュエリ』スターが愛した宝石たち	岩田 裕子／著	河出書房新社	755.3
『オードリー・ヘプバーン』	高山 裕美子／編著	クレヴィス	778.253
『オードリー・ヘプバーン 98 の真実』	清藤 秀人／著	近代映画社	778.253
『オードリー・ヘップバーン 99 の言葉』	酒田 真実／著	リンダパブリッシャーズ	778.253
『オードリー・ヘプバーン・コレクション』		近代映画社	778.253
『オードリー・ヘプバーン』プリンセス・オブ・ハリウッド		近代映画社	778.253
『Audrey Hepburn』母、オードリーのこと	ショーン・ヘップバーン・フェラー／著	竹書房	778.253
『オードリー・ヘップバーン』妖精の秘密	ベルトラン・メイエ＝スタブレ／著	風媒社	778.253
『オードリーのように』 エレガントに生きるためのレッスン	パメラ・キーオ／著	近代映画社	778.253

コラム『ティファニーで朝食を』

今年はヘプバーンの没後 27 回忌、合掌！　　K.M.

今回の上映作品は、ブレイク・エドワーズ監督がアメリカの小説家トルーマン・カポーティの小説「ティファニーで朝食を」をベースに、1961 年に映画化したものです。エドワーズ監督は、50 年以上も続いた『ピンク・パンサー』シリーズの生みの親として有名ですが、今回上映の『ティファニーで朝食を』や『酒とバラの日々』など、文芸作品でも後年まで評価の高い作品を多く残しています。

原作者のカポーティ―は、当初マリリン・モンローを主役に据えることを条件に、映画化を了承したようですが、モンローが、この原作の内容から、セックスシンボルというイメージがより固定化することを嫌い、出演を断わったのですんなりとは実現せず、結局モンローとは全く対照的なイメージのスターのオードリー・ヘプバーンが主演を務めることになり、モンローのイメージに合わせて書かれていた「田舎での複雑な幼少期を過ごした 18 歳の若い娘ホリーが、第二次大戦下のニューヨークに出て、社会やモラルに束縛されず自由奔放に生きていく」という、純文学的ストーリーは、急遽ヘプバーンのイメージに合わせて「戦後 15 年のニューヨークでリッチな男性との結婚を夢見るヒロインがさまざまな問題を乗り越え、真実の愛にたどり着く」という、ラブ・ファンタジー的ストーリーに大幅に変更され、原作と映画はかなり異なるものになりました。

ちなみにカポーティ―の原作は、村上春樹の翻訳版が 2008 年に新潮社から発行されています。私は原作についてはある程度の予備知識があったのですが、ヘプバーンの作品は、'50 年代の『ローマの休日』しか見ておらず、彼女については上品で無邪気な＜おぼこ的＞な印象しかなかったので、本作の上映に先立つ DVD の試写前には、この映画の考えようによっては結構キワドイ作品の主人公として、ヘプバーンがうまくマッチするかと心配したのですが、杞憂でした。さすが、当時すでにアカデミー賞の最優秀主演女優賞受賞・ノミネート 4 回のヘプバーンです。ニューヨークを舞台とした大人のおとぎ話を作ろうとしていたエドワーズ監督の意図をしっかり咀嚼し、小悪魔のような雰囲気、猫を思わせる気まぐれな言動としなやかな立ち振る舞い、そしておしゃれなファッションセンスを兼ね備えた、文句なく魅力的なホリー・ゴライトリーが創造されていました。

注目シーンをいくつか紹介します。

① 巻頭タイトルバックの、夜明けのニューヨーク 5 番街ティファニー本店ショーウィンドウの前で、主人公ホリーがクロワッサンを齧っているシーン。ここで流れる主題歌「ムーン・リバー」は、アカデミー賞主題歌賞を受賞。ヘップバーンが身につけているジバンシィの黒いドレスは、現在では「世界一有名なドレス」と呼ばれることもあります。

② ホリーが同じアパートに住む相手役ポールを初めて招待する、彼女の部屋での立食パーティーのシーン。この作品で最もコミックなシーン。タバコを使ったギャグが傑作。

③ ヘプバーンが窓際に腰掛け「ムーン・リバー」を歌うシーン。この曲は音域の狭いオードリーのために作曲された。柔らかな歌声とロマンチックな歌詞はなかなかなもの。自由奔放なホリーのイメージに深みを与えています。

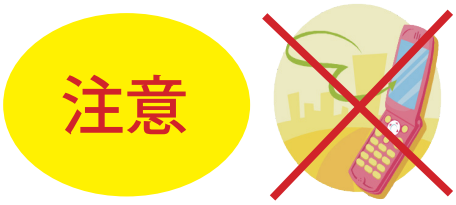
④ ホリーを迎えに田舎から出て来たホリーの夫ドクとポールが、セントラルパークで会話を交わすシーン。このシーンで、後に極めて重要な役割を果たす駄菓子のおまけ（指輪）がポールの手に渡ります。

⑤ ホリーとポールが朝の 5 番街でデートするシーン。途中立ち寄ったティファニー本店内での二人と店員との商談シーンは、私がこの作品の中で最も好きなシーン。ここで「駄菓子のおまけ」が大活躍する。

⑥ そして雨の中、「名無しの猫」をサンドウィッチにしての感動のラストシーン。二人がこの後、上手く行くかどうかなんて考えないことです。何しろ大人のおとぎ話なのですから。

7/18 『ゴリオ爺さん』の感想

・人間の一生をあらためて考えさせられました。紆余曲折の人生模様があり、そして最後に「死」、「墓場」へと・・・。嬉しくもあり、悲しくもあり・・・。きらびやかで華麗な社交界と裏腹の虚しき「人間の愛憎劇」・・・。胸が詰まりました。人生の本質を衝く凄い映画でした。本気で、日々を大切にする人生の在り方・歩みの手応えを真剣に考えさせられました。また、いつもこの DVD シネマを支えて下さるスタッフの方々に深く感謝をいたします。この岡崎から一人でも多くの『センテナリアン』（一世紀以上生きた人）が誕生するとよいですね。そして、そしてこの「りぶら」が世界文化遺産に。大きい夢ですが一歩ずつ努力しませんか。
⇒「100 分の視聴」でこれだけの感動を喚起できる「映画という情報媒体」は矢張りすごいなーと改めて感じ入っています。ありがとうございました。
・音楽とフランス語の音が良かった。最後の景色が良かった。父親の二人の娘に対しての愛情の深さに感動しました。
・不幸な人だらけの映画でしたが、若い人たちのたくましさも印象に残りました。
・人間とは、どんな時も、強く生きて行くものだなぁ、と あらためて思った。
・すばらしい映画でした。幸せとは なんだろうと考えさせられました。
・現実的？最後には肉親の愛はあると思ったのに。一人でなかったのは良かった。
・終わりに「そのように 娘たちを育てたんだ」というゴリオ爺さんのことばが印象的でした。
・虚栄心ばかりで恐ろしい。どこにでもありますね。
・途中まで娘二人の区別がつきませんでした。
・いまいち よくわからなかった！
・いつも ありがとうございます。洋画は内容が浅く、つまらないです。日本人の感性とは合わないのか・・・。また、邦画を見たいです。
・アラン・ドロンの『さらば友よ』、『シェルブールの雨傘』の上映を。
・ありがとうございます。うれしかったです。
・上映中 スマホを開いてピカピカされているご婦人たちがいました。注意してください。また、終了間近、ライトが点灯しないうちから退出する人たちがいました。
・上映中にケイタイをいじっている人が意外に多く、まぶしくて目が痛くなりました。メールを読むのは、上映がおわってからでもいいのでは？と思いました。



上映中の携帯操作は、周りの方の迷惑になりますのでご遠慮下さい。また、観賞マナーを守り、終了後も明るくなるまで席を立たないようにお願いします。**上映開始時間を過ぎての入場は、ご遠慮ください。**

サロン・ド・シネマについて

ホールホワイエにて寄付金でお茶菓子の提供をしています。映画の上映前にご利用ください。但し、「夜の部」には開催しません。

りぶらホールにはヒアリングループが設置されています。補聴器を利用されている方は、T モードに切り替えてください。

Hearing Loop

第 79 回上映会のご案内

自由を我らに

字幕上映

A NOUS LA LIBERTE

9 月 19 日（木）

① 10:30 ～　② 14:00 ～　③ 18:30 ～

同じ刑務所の仲間であるルイ (レーモン・コルディ) とエミール (アンリ・マルシャン) は脱獄を企てるが、要領のよいルイだけが成功し、彼は巨大な蓄音機会社の社長にまで出世する。一方､刑期を終えたエミールは、一目ぼれした娘をきっかけにルイの工場で働くことになる。初めはエミールを金で厄介払いしようとしていたルイも彼の友情を取り戻すのだが、その後…。

監督：ルネ・クレール
出演：アンリ・マルシャン、レイモン・コルディ
　　ポール・オリヴィエ
製作：1931 年　フランス　モノクロ　86 分

2019 年度の上映のご案内（上映作品は変更になる場合があります。）

2020 年 1 月～ 3 月ホール改修工事のため、2019 年度の上映会は下記の通りとなります。

第 80 回	10 月 17 日（木）	『終着駅』	① 10:30 ～	② 14:00 ～　③ 18:30 ～
第 81 回	11 月 28 日（木）	『キリマンジャロの雪』	① 10:30 ～	② 14:00 ～　③ 18:30 ～
第 82 回	12 月 19 日（木）	『ビューティフルメモリー』	① 10:30 ～	② 14:00 ～　③ 18:30 ～
2020 年度				
第 83 回	4 月 16 日（木）	未定		
第 84 回	5 月 21 日（木）	未定		
第 85 回	6 月 25 日（木）	未定		

上映開始時間を過ぎての入場は、ご遠慮ください。

りぶらサポータークラブ事務局：市民活動センター tel：23-3114　ホームページ：https://www.libra-sc.com/